

生き死にの形

死者を雪に埋める

うん、冬でも、死人を埋めに行くよお、雪掃って。だから雪掃って行ってえ、ここ土葬だったからむかし、ほれ雪さあ、五尺も六尺も降んにいいっちゃ。その晩に土掘っていぐと、おどけでねえがら、土まで行がねえでは、死人を雪さ埋めで、春、出したこどあんだ。一日、掘りつけらんねえはんで。

ああ、むかしほだね、なんもかんも、十尺ぐれえあったつつんだは。ここ全部ね、雪んなってさ、こゆな木全部隠れてさは、雪ばりになんだ。ああ、真っ白い銀世界になんだ。

(『升沢にくらす』 p.263)

嫁ご衣裳にもんぺ・長靴

一の関に姉さまいだったの、うちの旦那のお姉さんが。私行ったり来たりしでたところ。そのお姉さんが見込んでね、世話さったの。うん、半月くれえ前だかなあ。親に「こゆふに呉〔け〕えるよにしだからなあ」って言わたの。「わがんねえ」って、言わんねかった。うん、「山（やあま）さ、嫌（や）あんだこだやあ」どって、泣ぎ泣ぎ家（うち）出はったの。だれえ、あんな、五里も六里もねえ、あんだ。そんで見にもしねえの、旦那どこ。そのお姉さん家（い）ささあ、おらいの旦那が、一回泊まってでね。ちょっと、お辞儀して顔っこ見だばり。そうそう、ちょっとね、ちょっと見ただけ。

十一月の末だったかねえ。髪結いさん頼んで髪結って、嫁ご衣裳（いしょ）着で。いまのお嫁衣装でねえけどね、むがしのね、裾さ少し模様付かった、あいつだったおん。あれ、お母さんのお下がりでもあったんだかしねえよ。その嫁ご衣裳（いしょ）着で、もんぺ穿いで長靴履いで、欠入のとごの丸太橋ね、そごんとご渡（わだ）って。こうね、丸太三本ばりで、そごさ板（いだ）っこ敷いてあるだけやった。ちょっと崖だけけどもね、あそこ、おおつかねぐて、おおつかねぐて、あんだ。ほんとに男（おどこ）さん、先（さぎ）に渡っては。「嫁ご流れんなあ、嫁ご流れんなあ、落ちんなあ」どって。こわいかった、あんだ。

ほおんと、山っこ中ね、山っこ中（なが）、「どこだか、どこだか」「ましこ、まだか、まだか」って、来たよお。お昼も食（か）ねえからさあ、途中までね、若（わけ）え人たち、さんだっこ持ってね、おにぎり持ってきて、「食べらいん」どって。ほれ、お手伝（てって）えに行った人（ひ）たち、種沢から来たんだっけえ。太（ふっと）い栗の木あったのね。そこ平っこで休んで、ほいって来たの。うち出はる時降ってなかったの、山さ来たたら雪降ってきで、もぐるけえ雪あんだもの。ほんとに山の中、見だことも聞いたこどもねえもの。来てしまったから、なんにも言いようねえんだわなあ。

うん、んだけど、今はね、安気で楽でがす。

(『升沢にくらす』 p.276)